

## 在外研究報告

# 洛西滯在記

石川力山

### 一、はじめに

一九八七年四月より一九八九年三月まで、駒澤大学の在外研究に関する規程の定めるところに従い、「五山関係禪籍抄物資料・密參録及び天台宗口伝類の調査収集と比較検討」という研修課題を持って、花園大学仏教学科を受け入れ機関として平野宗淨先生を指導教授に（二年目は平野先生が瑞巌寺僧堂の老師として赴任されたのに伴い、入矢義高先生に指導教授をお願いした）、二年間の研修生活を大過なく送ることができた。またこの間、当初の一年間の予定を変更して、さらに一年間の研究期間の延長を大学当局より認めて頂いたことも、研修生活をより充実したものにすることができた要因であつた。

### 二、京都、祭りの都

一九八七年三月二十七日、成田・窪寺・鈴木の三学生の見送りを受け、十時四十分発の新幹線にて離京、京都に着くや直ちに花園大学事務所にて諸手続きを済ませ、研修期間の指導教授をお願いした平野宗淨先生を、住職地の大津市本堅田祥瑞寺に訪問する。祥瑞寺は、彼の室町期の異僧一休禪師が

研修地にあつては、花園大学の関係者各位、禪文化研究所員の皆さんを始めとして、京都市内の多くの研究機関の方々

華叟禪師に参じた旧跡で、特別趣向を凝らした風もないその景觀は、今も当時の面影を偲ばせる風情がある。開山堂には華叟禪師や一休禪師の木像も安置されている。

平野先生は老師の資格（曹洞宗の師家分上）もお持ちであるが、その気さくなお人柄は、今一休といった雰囲気がある。奥様の手料理で一献頂戴する。

京都での一年目の寄宿地は、禪宗研究会等で懇意にして頂いている東大史料編纂所の田中博美氏より、株式会社万上商店社長万上精一氏を御紹介頂き、万上氏所持の京都洛西御室仁和寺の斜向いにあるマンションの一室を拝借した。このマンションは京都の西北の外れの山裾にあり、部屋からは朝日に美しい山影を見せる比叡の山頂や東山の峰々、清水寺・東寺の塔、さらには伏見辺りの遠望や、天氣が好ければ桃山の城まで見晴かすことができる絶好の眺望の地にあり、花園大学に通うにも大変好都合で、有難かつた。二年目は、もと保健体育部教授の原山良勁先生のお世話にて、先生の住職地天寧寺の末寺で、先生が兼務もしておられる市内の大通院という寺に寄宿させて頂き、ここは交通的に至便の地にあり、先生には公私に亘り言葉には言い尽せないお世話になつた。

花園大学では、四月六日の教授会において紹介して頂き、いよいよ研修期間に入ったという実感を抱いたが、研究会等は月末からなので、かねての峰岸先生からの「祭りと桜を見

ずに何の京都研修ぞ」という御忠告を実践すべく、誓くは春の京都の祭りと桜見物に専念することにした。

四月八日、釈尊降誕の日なので、先ず手近な所から仁和寺を見学、降誕仏に甘茶を灌ぎ、次いで三国伝来の清涼寺式の釈尊像で有名な嵯峨野の清涼寺に足を延ばす。帰路、天竜寺を見たら、枝垂れ桜が満開、つつじも見頃であった。

四月十日、奥村土牛白寿記念展を見学、その息の長い創作活動に驚嘆する。帰路、平安神宮の桜を見物、また祇園御靈会の発祥の地である神泉苑にも立ち寄つた。

四月十一日、嵯峨清涼寺の大念佛狂言の見物に出かける。清涼寺の念佛狂言の起源は、遠く弘安二年（一二七九）に始まり、その後、融通念佛宗の円覚上人が布教の手段として踊りと狂言に仕立てたものとされ、京都の三大念佛狂言の一つであるが、近年に復興されたものであるという。芝居は無言劇で、演者はやはり素人らしいぎこちなさがあつたが、先年東京の観世能楽堂で演じられた黒川能の素朴さを見ている思いがして、逆に郷土芸能らしさがよかつた。演題は「花盗人」「愛宕詣」「土蜘蛛」の三題。

翌日の十二日は、これもまた実地見聞を楽しみにしていた、大徳寺近くの紫野今宮神社の「やわらぎ祭り」で、以前に学生が芸能史関係の卒論で取り上げたこともあり、寄宿先が近かつたことも関係し必見の祭りと思つていたものである

が、その実態も知らずに卒論の審査をしたことが頻りに悔やまれた。祭りの内容は、町毎の練り衆が踊りと歌舞を奉しながら町内の宿を出て今宮に向い、この時の歌の詞唱の末に「やすらえ花や」という囃し詞がついていることが祭りの名となつたものであるが、その囃し言葉の語源は、稻の花が実の熟さないうちに散つてしまわないのを願つて「ゆっくりせよ花よ」と唱えたものであつたとされ、田遊や田楽に関係した行事だつたようである。これが中世の御靈信仰の影響を受けて今日見られるような疫神鎮送の念仏踊りの形になつたものらしい。ともかくも京都は念仏に関わる諸行事がやたらと多い。神社境内に店を出す名物の「あぶり餅」を賞味して帰途につく。

京都における桜の時期の終焉を告げるのが、遅咲きで知られる仁和寺の、「御室桜」通称「お多福桜」である。四月十九日、近所の好みをもつて見物にでかける。名にしおう御室の桜であるが、境内は宴会の席が設けられてドンチャン騒ぎ。宴席に座りながら目の高さで見物出来る、背丈の低いズングリした姿が特徴で、これは土質によるものということで、それなりに面白味があるが、辺りの雰囲気もあって余り華麗さはない。それでもよく見れば、幾つかの種類が確認できる。車返し・有明・鬱金等、十数種の種類があるという。午後、突然春の雷が鳴り響く。そこで「正当恁麼時、浩大雷

声、天上人間豊法雨、老婆為汝悅春風」（『道元和尚伝録』卷十）の祖句を想起して、拙句一首、

春雷や 御室の桜も 震えおり

四月二十三日、「ガンデンデン」の囃しで知られる、壬生寺に伝わる重要無形民俗文化財の壬生狂言の見物に出かけ覚上人の創始とされ、こちらの方は八百円と有料なだけに演題も豊富で、舞台の建物も江戸期のもので重要文化財に指定されている。第一番目の出し物は「炮烙割り」で、これは毎日演じられるもの、数百枚の土器が一気に舞台下に叩き落され割られるのは壯觀である。一日五題演じられるというが、花折・堀川御所・酒蔵金蔵の四題まで見物したところで、上京のため一旦帰宅、夕方東京に向かう。

この外、五月には上賀茂・下賀茂両社の賀茂祭り（一名葵祭り）があり、六月は平安神宮の薪能、七月には四条通りを中心には歴史ある山車・鉾が曳きまわされる、八坂神社の祭りである祇園祭り、さらに十月には平安神宮の祭りである時代祭り等があり、せつせと通つた。ただし時代祭りだけは殆ど宗教色が感じられないもので、かつて宮中に勤仕し明治維新の際に活躍した山国隊などそれなりに歴史ある一團もあつたが、全体的に仮装行列を見ている気分であまり興が乗らず、二度と行く気はしなかつた。これら折々の祭りはわざわざ出

掛けていかなければならぬが、生活の場で体験出来る年中行事も多くあつた。子供達のまつりである地蔵盆などは、各町内毎に行われており、また八月十六日、東山如意ヶ岳で行われる盆行事「大文字送り火」は、二年目に寄寓した千本下長者町通り付近からよく見えることを発見、そんな街角で体験する宗教行事も見逃せないものであつた。

こう書いてくると、一年中祭り見物と展覧会・展示会めぐりに明け暮れたようで人聞きが悪いので、祭り見物等の話はこれくらいにして、次に研究会参加の状況に就いて報告することにする。

### 三、花園大学・禪文化研究所にて

研修先の花園大学は、大学院が併置されていないこともあり、学内での定期的な研究発表はあまり行われず、先生方の研究成果をお聞きする機会も殆どなかつたが、平野先生・入矢先生・柳田先生を中心とする演習・構義や研究会には殆んど出席させて頂き、久しう振りに学生に戻った気分で下準備に励んだ。

先ず、平野先生は学部の学生を対象に、「一休の『狂雲集』」の演習を開構しておられたので、一緒に拝聴した。平野先生には既に『狂雲集全釈』（春秋社刊）・『一休宗純』（名著普及会刊）・『一休和尚年譜の研究』（『禪文化研究所紀要』第

七号）・「一休和尚とその弟子達」（同十二号）・「大燈から一休へ」（『花きまざま』所収）・「『狂雲集』の思想的諸問題」（『日本仏教学会年報』三十八号）等の多数の一休関係の御論考がある一休研究の第一人者であり、その懇切な指導振りは大変参考になつた。『狂雲集』も含めた一休の風狂の世界を「時代の頽廃に対する時代の良心の自己批判と自己嫌悪、鋭くはあるが非力な良心の苦悶の象徴」（芳賀幸四郎「一休の狂とその歴史的診断」と見るか、「否定の論理にとりつかれたアウトサイダーの孤独な姿」「憎惡の哲学と紙一重のデカンダンスの美学」「反動イデオローグ」（桜井好郎「乱世の狂氣——一休宗純における政治と美学」と見るか、はたまた「凡情肯定の他力的面と、文学に近いところまで来た一休禅の自由さ」（岡松和夫「一休」「風流」の意味するもの）、あるいは「矛盾に満ちた現実のなかで、そこにどっぷりと浸りながら、しかも自律的に自由人・自然人として生きるための模索」「いかに自己に誠実に生き貫くべきかということの追求」（入矢義高「一休」「宗派別」日本の仏教・人と教え、臨済宗）として捉えるかは意見が分かれるところであろうが、平野先生の立場は、大徳寺教団と常に不即不離の関係を続ける一休に注目して、体制批判者・教団の現状批判者としての一休詩の解釈に腐心しておられるように拝見した。余談になるが、復学後の二部短大佛教科の「禪と文化

という授業で、『狂雲集』を読みながら中世社会史における禅宗の位置を考えて見ようと思い立ったのも、平野先生の授業で学生諸君と一休詩の世界を味わったことに起因する。

次に、入矢先生は花園大学では学部学生を対象とした演習と専攻科の学生のための講義を二コマ持つておられ、まず専攻科の授業は、初年度はかつて筑摩書房の『禅の語録』シリーズで訳註を出版されたことのある『龐居士語錄』の全面的見直しで、殆ど前稿を改めた部分もあるほどで、学問に対する真摯な変わらぬ姿勢は感銘深いものがあった。初年度はさらに、元の中峰明本（一二五三～一三二三）の『東語西話』を講読した。この授業は二年度目は『景德伝燈錄』卷二十八の講読をされた。花園大学や後述の禅文化研究所における演習・構義・輪読研究において扱われたテキストは、平野先生の『狂雲集』を除いて殆ど中国禅宗に関わるもので、大学院の修士課程時代に手掛けた中国禅宗の勉強を久し振りに思い返すことになった。このお陰もあって、入矢先生の喜寿記念論集の『祥文化研究所紀要』十五号に「宋版『龐居士語錄』について—西明寺所蔵『龐居士語錄』の紹介とその資料的価値—」、鎌田茂雄先生の還暦記念論集『中国の仏教と文化』に「玄沙三種病人考—禅僧の社会意識について—」という二つの中国禅宗関係の論文を発表することが出来た。

また、ここ数年来入矢先生は『雲門広録』を深く読み込ん

でおられ、近年書かれたものにも雲門の語を度々引用しておられるが、これは学部の学生を対象とした授業として開講しておられるもので、この授業にも二年間殆ど欠かさず出席させて頂いた。これら入矢先生の授業には、学生はほんの数人で、他に平野先生をはじめ、真継伸彦・西尾賢隆・古賀英彦・衣川賢次・西口芳男・下定雅弘といった学内外の先生方が出席されという、学部の授業とは思えない雰囲気で行われる授業で、先生自身が十分な事前の下調べをなした上で臨まるので、毎時間充実した内容の構義が行なわれ、特に『雲門広録』における雲門一生の三段階の思想展開に関する先生の思い入れは、殆ど毎時間拝聴することが出来た。

この外に、禅文化研究所で隔週水曜日午後三時から行われる、中国唐代禅籍班による唐代禅語録の輪読会に参加させて頂いたが、この輪読研究会のこれまでの成果は、すでに『馬祖語録』一巻、及び『玄沙広録』三巻の内の二巻までを刊行済みで（いずれも禅文化研究所刊行）、三巻目もすでに原稿の用意もできており、着実な成果を世に出しておられる。今回の一回の研修期間中の二年は『南泉語録』を読んだが、すでに前年度から読み初めて、『古尊宿語要』所収の『南泉和尚語要』を読み終えており、各種の燈史や語録・公案集より収集した南泉の語や機縁の解説に取り掛かっていた。この研究会の出席者は入矢先生をキヤップに、渋谷厚保老師（妙心寺雜華院

御住職）・平野宗淨・真継伸彦（姫路獨協大学教授、作家）・沖本克己（花大教授）・衣川賢次（花大助教授）・西脇常記（京大教授）・西口芳男（花大構師）等の諸先生で、二年目には竜谷大学の稻垣久雄先生も加わられた。

『南泉語録』の輪読研究会の進行の仕方は、各自が話頭を一則ずつ分担して最も良いと判断されるテキストを選定し、書き下し文・口語訳・註等を内容とするペーパーを作成して読み上げ、これを皆で検討し訂正・削除・付加等の手を加えて原稿化するわけであるが、毎回用意したペーパーが原型を留めなくなほど削除され、また赤ペンが加わり、がっかりして帰途につくというのが通例であったが、時には殆ど無傷で無事パスすることもあり、内心はほくほくで、大抵終了後に近所の飲み屋で一献ということになるのであるが、こんな時の酒は特に美味に感じられた。

二年の南泉の語録の輪読を通じて心に残ったのは、いわゆる「異類中行」の説示で、この話に関連する説示や機縁、後人の拈提も多数あり、研究会の主要テーマともなって、一時期殆ど毎回この関連の話が続くという具合であった。その説示とは、『祖堂集』巻十六の南泉章から引用すれば、次のようなものである。

師、上堂する毎に云く、「近日禪師太多し。一个の痴鈍底を覗むるに、得べからず。阿尔諸人、錯つて用心すること莫

れ。此の事を体せんと欲せば、直に須らく仏未だ出世せざる已前、都て一切の名字なく、密用潛かに通じて人の覺知するなき、与歎の時に向いて体得すべくして、大いに小分の相応有り。所以に道う、祖仏は有ることを知らず、狸奴白牯は却つて有ることを知ると。何を以て此の如くなるや。他、却つて如許多般の情量なければなり。所以に喚んで如々と作さば早に是れ変なり。直に須らく異類中に向いて行すべし。只如えば五祖大師下に五百九十九人有りて、尽く仏法を会す。唯だ盧行者のみ一人有つて仏法を会せず、他は只だ道を会するのみ。直い諸仏出世し来るに至るも、只だ人をして道を会せしむるのみにして、別事を為さず。云々。

「異類中行」の問題はきわめて難解で、これが文字通りに狸奴白牯の畜生行そのものであるかどうかについては、結局結論が出なかつたようにおもわれるが、沖本先生が入矢先生の喜寿記念論文集『禪文化研究所紀要』（第十五号）に「異類について」と題して発表されたのは、この検討の成果である。この異類中行と関連して出てくるのが、「百年後（死後）、山下の檀越の家に、一頭の水牯牛と作り去らん」という南泉の順世の際の言葉で、これは道元禪師が『典座教訓』で渦山の語としても引用するものであるが、その意味するところはやはり難解である。禪の主張する行動様式の行き着く所が、狸奴白牯や水牯牛といった畜生の行、徹底した下座行

であるとされるなら、行道体系としての清規の実践はいかなる意味を持ち得るか。それにしても、これが単なる譬喻であつたとしても、「狸奴白牯、却つて有を知る」といふ表現に出会うと、やはり到底单なる譬喻では済まされなくなる。

もう一つ禅文化研究所で定期的に行われている研究会に、柳田聖山先生を中心に進められている、道元の集成ともされる『真字正法眼藏』すなわち『三百則』の輪読会がある。こちらは柳田聖山先生が京都大学人文科学研究所におられた時分より継続して行われているもので、先生が京大を退官されてからは、禅文化研究所に会場を移して、隔週金曜日に行われている。先に人文科学研究所に留学された石井修道先生も出席させていた研究会であるから、すでに十年近い検討を重ねている会で、それだけに着実な成果を蓄積しておられ、石井先生が以前に大本山永平寺の機関誌『傘松』に連載され、一本にまとめ『中国禪宗史話』と題して禅文化研究所から刊行されたのも、この研究会への参加が契機となつたものであろう。筆者の在京中におけるこの研究会への参加者は、入矢先生を始めとして、平野宗淨・常盤義伸（花大教授）・吉川忠夫（京大人文研教授）・衣川賢次・吾妻重二（関西大学講師）・下定雅弘（帝塚山学院大助教授）・川島常明（花大国際禪学研究所）・稻垣久雄・西口芳男等の諸先生方であつた。

この『三百則』の研究会は、柳田先生や入矢先生も担当し、やはり一則ずつ分担してペーパーを作成していくのは『南泉語錄』の輪読会の場合と同じであるが、むしろ各則の直接の典拠を確定することも重要なテーマで、同一話頭を載せる『祖堂集』を始めとする語録や公案集の該当部分も資料として提供され、このことは必然的に話頭の変遷過程の確認にもつながり、禅宗思想史の一側面の検討という意味も有するものであった。テキストは河村孝道先生の作成された、「真法寺本」「成高寺本」「拈評三百則本」の三本を対照にしたものを使い、昭和六十一年度は中巻の九十一則から始まり、下巻の五十二則まで読了した。各則の典拠探しには、石井先生の「真字『正法眼藏』の基づく資料について」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』三号）及び「『宗門統要集』と真字『正法眼藏』—真字『正法眼藏』の出典の全面的補正—」（『宗学研究』二十七号）が座右を離せない欠くことができない論文で、道元の他の著作への影響や引用状況については、鏡島元隆先生の『道元禪師と引用經典語録の研究』（木耳社刊）と、「道元禪師の引用燈史・語録一覽表」（『駒沢大学仏教学部論集』十七号）が頼りであった。そして、こちらの研究会の方のもう一つの特色は、一則毎に話頭の内容に関してコメントを付けることが慣例となり、ペーパー作成にはこの部分が一番気を使つた。

花園大学および禅文化研究所における講義や研究会参加は以上のようなもので、週二日の登校であったが、語録を根本的に読み直し禅の思想を探る基礎的な作業を蔑ろにしてきた、これまでの勉強法を反省する好機会を得たことは、資料調査という目的とは別に、大きな収穫であった。この週二日以外の日を、他の研究会や史料調査に使ったわけであるが、先ず花園大学以外での研究会への参加について報告しておきたい。

#### 四、「部落差別と宗教」研究会

一九七九年八月、アメリカのプリンストンで開催された第三回世界宗教者平和会議の現実問題部会における、いわゆる町田差別発言事件は、当該の曹洞宗のみならず日本の全仏教教団、さらにはキリスト教や神道等の宗教各派に至るまで、「部落問題」への関わりを促したことは周知の通りである。筆者もこれに関連して曹洞宗同和審議会の専門部会や小委員会に出席の機会があつたことから、「部落問題」「同和問題」についてのより深い理解と明確な認識を得たいものとかねてより考えていた。

一方、中世史や日本仏教史を専攻する者にとって、日本史における賤民・非人・被差別民の課題は避けて通れない問題であり、差別の歴史に機能した仏教・宗教の役割も重要な検

討課題として浮上するに至った。そして、特に右の事件を契機として宗門内における様々な差別的体質も浮き彫りにされ、中世に機能した切紙資料の中にもいくつかの「差別切紙」があつて、その取扱いをめぐって糾弾確認も行われた。筆者はこの切紙資料を、中世宗教史を語る上からは欠くことのできない史料とする立場を取つており、その集成の作業を進めていたが、関東地方はやはりこうした問題については認識が低いと言わざるを得ず、研究会なども殆ど行われていなかつてよい。これに比して関西地方は、大阪には部落解放研究所が、京都にも部落問題研究所という部落問題の民間学術研究機関があつてそれぞれ研究誌も発刊しているので、この機会に何か研究会に出席してせっかくの京都滞在を出来る限り有効に使いたいと思っていたところ、まことに好都合なことに平野先生が重要なメンバーになつて『「部落差別と宗教」研究会』という民間研究団体を紹介して頂き、毎月一回の研究会には殆ど出席させて頂いた。

神や仏・悟りといった超歴史性・超社会性を主張する宗教も、社会現象としての側面からは、これを生み出した社会構造と無縁ではあり得ない。部落差別と宗教・仏教との関わりもこの点で軌を一にする。現代の日本が抱える最大の社会問題ともいわれる部落問題を機軸として、この矛盾を解明しよ

うとして結成されたのが『「部落差別と宗教」研究会』で、一九七六年に二葉憲香先生（現京都女子大学園長）を代表委員として発足した（『部落問題事典』七八二頁）。谷口修太郎（事務局長）・平野宗淨・真継伸彦・柏原祐泉・細川行信等の諸先生がその主要なメンバーで、毎年テーマを決めて月例会を開催し、夏期には合宿をして集中的に問題を煮つめており、共同調査・研究として進めて来た「島津藩支配下における一向宗禁制と身分差別の研究」も、その報告書全五巻が同朋舎より刊行の予定という。

この研究会の一九八七年度のテーマは、「暮しと宗教—女性差別を中心にして」ということで、下京区の高倉会館を会場に月例会が開催された。会では主に浄土真宗における寺庭婦人）の女性差別問題、例えば坊守（曹洞宗における寺庭婦人）の位置付けや役割に関する因習的体質、さらに教団内における差別事象として、男性と同じ教師資格を有しているにも拘らず住職や教会主官者になれない、宗議会や教団会においても女性有教師の参加の道が開かれていない、その他、寺族女性の得度・堂班・衣体における女性としての制限等、多くの実態が浮かび上がった。はじめ報告を聞いた印象としては、真宗内部の問題に不案内なために実感が湧かず、宗祖親鸞以来非僧非俗を標榜する浄土真宗と、建前としては出家教団の体裁を取つておる曹洞宗とでは事情も異なることから、多少違

和感がないでもなかつたが、内実としては在家教団化している曹洞宗門の実態を考えるなら、早晚、あるいは極近い将来に曹洞宗においても当然起つてくる問題として受け止めておく必要性を感じた。

夏期恒例の合宿研究集会は、八月二十五日から二十七日まで、寄宿先に近い仁和寺内の御室会館を会場としておこなわれたので、筆者も宿泊はしなかつたが全日程参加した。報告者及び報告論題は、二葉憲香（研究会代表委員）「暮しと宗教—テーマの設定について」・源淳子（大谷大講師）「佛教と女性差別」・柏原祐泉（大谷大名譽教授）「佛教と女人の歴史」・藤原不三枝（大谷派覺了寺副住職）「本願寺と女性差別」・平野宗淨（花大教授）「禪系教団と女性差別」・大越愛子（花大講師）「キリスト教と女性差別」・山下明子（MCC宗教研究所員）「インドの宗教と不可触民の女たち」・志水宏行（竜谷大教授）「真宗門徒の法式と生活」・真継伸彦（作家）「文学に見る暮らしと宗教」・谷口修太郎（研究会事務局長）「暮しと宗教の課題」等で（敬称略）、夕食後の自由討論も活発に行われた。中でも一九八四年四月から一年余にわたつておもに南インドの地に滞在して初めて不可触民の女性達の実態を調査された山下氏の報告は、『インド・不可触民の女たち』（明石書店刊）という同氏の著書を拝見した直後であつただけに、印象深い報告であつた。その

後、筆者にも曹洞宗の立場から何か発表せよという依頼があったので、暮れも押し迫った十二月十二日、「曹洞宗における女性の位置」と題し、現在の宗制における寺族・寺庭婦人規程の抱える問題や、道元禪師の著述に見られる出家在家・女人成仏の問題、尼僧の歴史と明治以来の尼僧の権益主張運動の過程等について報告した。筆者のものも含めてこれらは後日報告として出版される予定である。

一九八八年度は、前年十二月十六日・十七日両日にわたつて七条堀川の興聖会館で開催されたシンポジウム「親鸞の信心と『訓覇發言』」を承けて（筆者欠席）、真宗大谷派内で差別図書ではないかとして取り上げられていた、元大谷派の宗務総長訓覇信雄師の講演記録『同朋社会の顕現』の問題が中心に論議され、二月二十七日には望月広三師（大谷派浄泉寺住職）「訓覇師差別発言をめぐる諸問題」、四月二十三日には松根鷹氏（部落解放研究所宗教部会幹事）「差別事件と宗教教団」、五月二十八日には福嶋寛隆氏（龍谷大教授）「淨土真宗の信心理解と差別の問題」と相次いで報告がなされ、同書の性差別・精神障害者差別・部落解放運動の否定などの諸点が明らかにされた。この問題は後に部落解放同盟の糾弾を受けたことは新聞紙上で報じられた通りである。また訓覇師の差別発言には靖国問題も含まれていたことから、六月二十五日には戸次公正師（大谷派南溟寺住職）の「靖国問題と仏教

者」と題する報告があり、政治絡みで噴出している国家と宗教に関わる様々な問題提起がなされた。

この年の夏期研究集会は、八月三日から五日にかけ「部落解放運動と宗教界」というテーマで、伏見区醍醐寺の修証殿を会場として行われた。報告者及び報告内容は、二葉憲香「宗教界における人間解放」、松根鷹「宗教教団と差別事件」、赤松徹真（龍谷大助教授）「靖国問題と仏教者」、小森龍邦（部落解放同盟中央本部書記長）「解放運動から見た宗教界」その他で、特に近年、解放運動の進展に逆行するかのような仏教者による差別的言動が目立ち、事件も多発しているとして、東西両本願寺派をはじめ曹洞宗の事例も報告された。

こうした問題との関わりは、純粹に研究会とは銘打つてはいても、社会運動として展開されなければならない方向を持つものであり、会員も多彩で議論の赴く所必然的にそれぞれの立場の主張が鮮明になってきて、その意味でも多くのことを考えさせられた。また、この夏期研究集会には、駒沢大学 大学院の学生奥野昭典、卒業生で聴講生の千葉正の両君が参加してくれたが、こうした問題に興味を抱いてくれる学生諸君も徐々に出てきてくれる状況にあることは好ましい。

なお、同年夏頃より昭和天皇の容態が悪化しはじめるなどもに、研究会でもこの時期に天皇制問題を議論しておく必要があるとして、月例会ではこの問題を連続して取り上げてお

られたが、花園大学で再開されることになった禅学研究会での発表や仏教史学会での報告の依頼も受け、さらに宗学大会での発表の準備と重なったために中々思うように研究会に出席できなくなつたことは、得難い機会であつただけに残念であった。またこの研究会を通じて、浄土真宗大谷派の僧侶で部落差別をはじめあらゆる差別問題に対し積極的に取り組んでおられる望月広三師を知り得たことは好運であつたが、師については後に紹介したい。

## 五、史料調査について

京都研修の最大目標である史料調査の報告が後になつたが、多方面の方々にお世話願い、史料調査・収集の作業も若干行うことが出来たので、次に箇条書に研修期間中の調査状況と収集史料について記しておくことにする。

### ①京都天寧寺史料調査

京都市上京区寺町通りの北の端に位置する天寧寺は、もと会津の地にあり、応永二十八年（一四二一）傑堂能勝禪師の開山で、芦名氏十一代の左近將監盛信を開基として建立された。越後岩船の耕雲寺を本寺とし、二世南英謙宗が中興となりこの時より芦名氏累代の菩提寺として栄え、三世瑚海中瑞・四世韋天統文・五世梅菴亨竹・六世維贍玄怡・七世天府朝元・八世一氣正元・九世雪菴文立・十世仁菴善恕と続いた

が、次の祥山曼吉（一五九五）の時代の天正十七年（一五八九）六月、伊達政宗の会津侵攻で兵火に逢い、曼吉は本尊や法寶等を收拾し、門人光吉を伴い京都に逃れて、天台宗松蔭坊の遺跡を継ぎ一寺を再建した、これが京都の天寧寺である。同寺所蔵の曼吉の年譜には、

○六十五歳、天正十七年己丑六月五日、会津乱入、十一日寺家焼却、同七月廿六日会津出歩、同九月三日信州高李常楽寺逗留、

○六十六歳、天正十八年庚寅三月四日、横湯入上条山居、同八月四日、曼菊死、同九月三日山居ヲ出歩、同廿八日、京木下道正着、

と記されており、京までの道程の苦難が知られる。この旅の途中で弟子の曼菊も失っている。会津の天寧寺はその後、蒲生氏郷が岡左内に命じて修復再建させ、江戸期には僧録の任に当たつた。こうして京の地にも建立された天寧寺であるが、その後は別々の道を歩むことになり今日に至つてはいる。

京都天寧寺は、馬祖・龐居士相見図や野々村仁清作の銅絵水仙図茶碗をはじめ、茶人金森宗和像、及び宗和作の茶人利休居士像等、多数の古美術品も所蔵していることで知られてゐるが、開創以来の古文書も多数所蔵されている。たまたま來京していた中条道昭氏（現駒大講師）が学生時代から懇意にさせていた関係もあり、原山先生のお取り計らいで、一九

八七年八月二十一日、これまで全く公開していなかつた古文

書等を調査し、重要な文献・文書類を殆んどすべてマイクロ

フィルムに収録することが出来た。同寺三世には、剣道示現

流の開祖でその極意を薩摩藩士東郷藤兵衛重位に授けた閑翁

善吉（一五六七—一六〇二）がおり、収集史料のなかには珍

しい示現流関係の相伝書類も多数含まれていて。なお蛇足にならうが、島津藩の御流儀となる示現流を薩摩の地に定着させた東郷重位の生涯を描いたのが、津本陽の小説『薩南示現流』であり、天寧寺裏の杉木立の中における曇吉からの示現

流極意相伝の場面が描写されているが、小説の中では相国寺の境内がモデルになつてゐるので念のため。

天寧寺所蔵史料としては、切紙・『正法眼藏』・『宝慶記』・宗門人別帳等膨大な量があつたが、次にその収集史料の中から主なもの目録を掲げておく。

天寧寺所蔵史料としては、切紙・江戸中期までのものおよそ三百余通

口、傑堂・南英、及び開山・世代関係墨跡・頂相

ハ、示現流関係相伝書・示現流聞書・示現聞書譬喻・耳ヲ

心声意道・白紙書譬喻等

二、雑学事件関係文書一六点

ホ、出家略作法—天正十三年（一五八五）、長巖周養書写

ヘ、正法眼藏—享保六年（一七二一）、密乘明顕書写

ト、宝慶記—享保七年、密乘明顕書写

チ、その他一人別帳・由緒・校割帳等

## ②法金剛院（律宗）所蔵史料

天寧寺の先住の奥様より、京都で余り知られていない名所として、花園の双ヶ丘の裾に位置する律宗法金剛院を紹介さ

れていたので、六月十七日、ブライと出かけて見た。本尊は鳥羽上皇より法橋の位を授かった院覚作の堂々たる重要文化財指定の阿弥陀如来で、耐火建築の御堂に安置されていた。

他に文化財も多いが、この見所は七月から八月にかけて次々と花を開く蓮華で、西円寺青蓮・唐招提寺蓮・廬山蓮・ネール蓮・一天四海蓮・原始蓮・曙蓮・ミセススローカム・天笠蓮等々、五十種に近い蓮華が日を迫つて咲き続ける。これは一度や二度足を運んだぐらいでは見尽くせない品種の多彩さで、それでも二度ほど通つてみた。この法金剛院の堂内に展示してある、十一面觀音菩薩胎内文書（重文指定）の中に、筆者が現在集成を進めている切紙の「袈裟曼陀羅」があつた。同胎内文書の中には、次のような鎌倉期元応元年（一三一九）の造像願文があつた。

正和四年十月廿一日より十一面觀音造立始ハしめて、元応元年

六月十八日、諸宗高僧御名、諸多羅尼、名号書写文等奉納畢、

願是之法三尼三寸十面觀音造立供養意趣者、不及自力間、一万

三千人之上下諸人御力奉加工て成畢、過去現在未來三世利益□

同一人も成仏也、□の旨無皆觀音利養ありて、安要降刹往生弥

陀觀音同等云云、（中略）

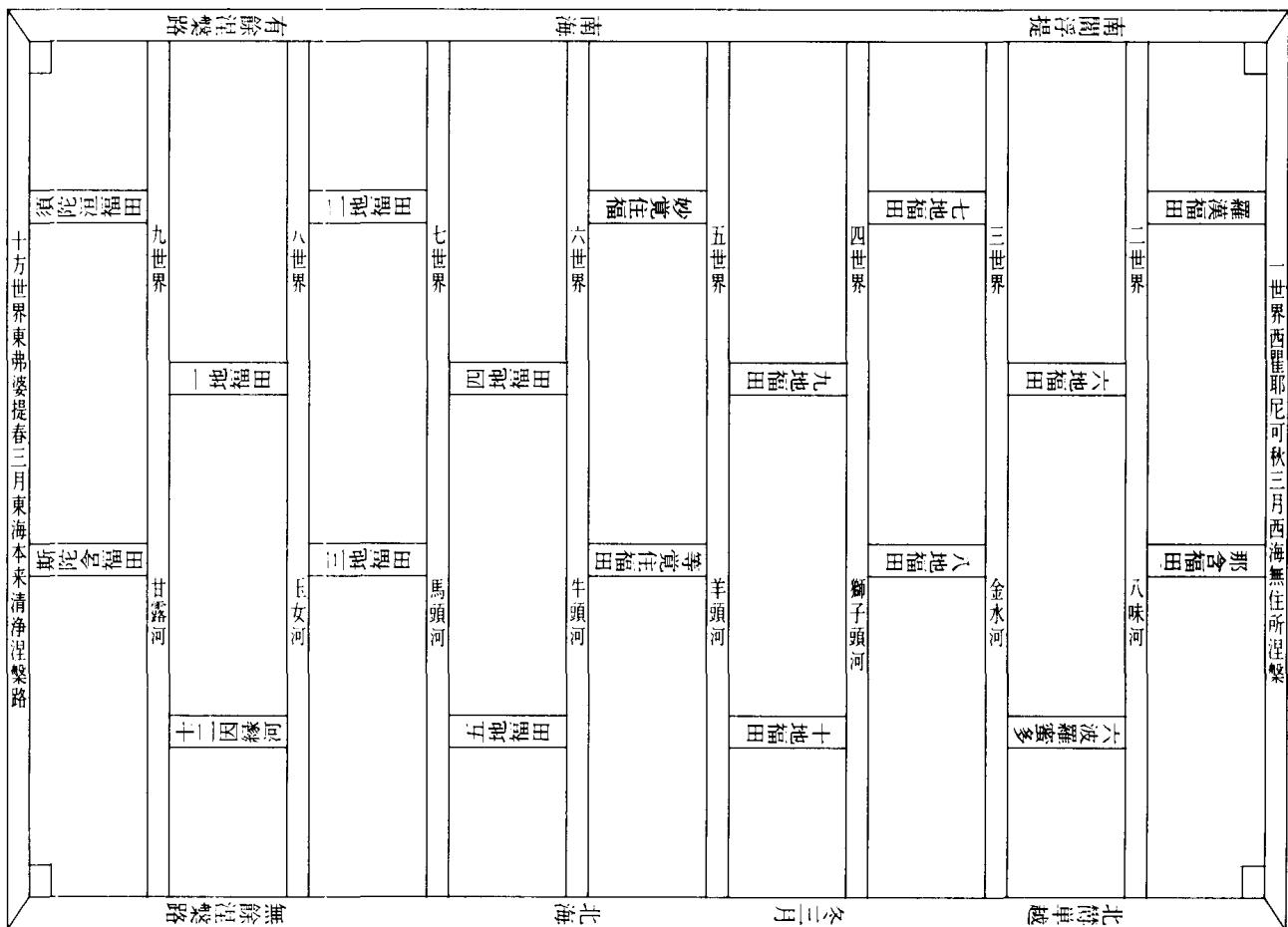
元応元年六月十八日申時書写畢

金剛伝子円宗朝海敬白

曹洞宗切紙の源流をどこに求めるかは個々の事例に即して考えられなければならないが、京都研修に当たつて作業仮説として、天台口伝法門を想定していたが、最初に確認出来たのが律宗所伝のものであつたことは以外であつた。しかし法金剛院は、平安末には御室仁和寺との関係が見られるし、また浄土信仰の寺としての歴史もあるという複雑な宗派所属の経緯があつて、必ずしも特定の宗派の伝承とは決定しかねるようである。参考までにその図を下に掲げておく。

③鷹ヶ峰源光庵切紙調査

一九八八年九月十五日、大谷大学における日本宗教学会出席のため来京された峰岸先生が、円山道白禅師開創の源光庵の現御住職とは旧知の間柄と伺い同行させてもらい、同寺所蔵の切紙資料を拝見させて頂く機会を得た。御所蔵の切紙は、江戸中期の円山派下のものが百数十点あつた。この時は予備調査のつもりであつたことから、比較検討のための資料等を持参しなかつたので、いずれ改めて調査させて頂くこと



重要文化財十一面觀音胎内文書袈裟曼陀羅(京都法金剛院蔵)  
(各葉の梵字種子は省略した)

を約して辞去した。

④静岡県正林寺調査

仏教学部教授田中良昭先生の御自坊正林寺（小笠郡小笠町）で、県史編纂のための史料調査に際し、出家・授戒作法関係の古い資料が発見されたと伺つたので、一九八八年十一月二十八日、先生が帰寺される日に合わせて参上し、貴重な資料の写真撮影をさせて頂いた。

正林寺は、永正十四年（一五一七）今川氏親が亡父義忠のために建立を発願し、焼津林叟院開山賢仲繁哲の法嗣大樹宗光（一四七三～一五五〇）を開山に請して、義忠戦死の地である塩買坂に近い現在地に創建し国源山昌桂寺と名付けられ、天文二十年（一五五一）には昌林寺、関ヶ原合戦のころに正林寺と改められた。この度発見された史料はいずれも、従来知られている『仏祖正伝菩薩戒作法』や『得度略作法』とは著しくことなるテキストで、今後の禪戒研究関係の貴重な資料となることは間違いない。資料は全部で三点で、次のものである。

イ、略受戒并受衣作法

ロ、七仏六十餘代宝号并正授戒—受泉（花押）

ハ、菩薩聽受戒文

（識語）以先師喜山和尚相伝之正本書付授、附法小師

洛西滯在記（石川）

性岱藏主、於備中州洞松寺丈室伝授之、

享徳三戊申年（一四五四）三月廿一日

前大洞茂林叟志繁

イ、ロはともに正林寺二世琴峰寿泉（受泉、一四六七～一五八二）の親蹟になる、正林寺の開創間もない頃の史料であり、ハの『菩薩聽受戒文』は備中洞松寺の室内に伝來した、太源宗真—梅山聞本—恕仲天闇—喜山性讚—茂林志繁—崇芝性岱—賢仲繁哲—大樹宗光と相承した確かな由来を有する史料で、いずれも貴重な伝授資料であることは前述の通りである。当面、中世の室内伝授物の整理作業を行つている筆者にとって、これらの諸史料の発見は極めて大きな意味を有しており、学恩・法愛に深く感謝したい。

⑤平野宗淨先生提供臨済宗密參録

平野先生が撮影所持している、臨済宗大徳寺派関係の密參資料の貸与をうけて、プリント収集したものは、次の三点である。

イ、古則秘錄—大徳寺派幡竜庵本、開山百二十則、天真文庫藏

ロ、古則秘錄—大徳寺派東海寺本、開山三十一則、碧六十

九則、同百則

ハ、古則秘錄—大徳寺派靈泉院本、大燈百二十則、天真文

イ、洞家代語—竜州文海（一五四一）の代語記録

ロ、敲門瓦集—永祿五年（一五六二）頃書写、洞家門参・

イ、得度略作法—瑩山所伝（元亨四年）、雲州雲樹寺室中

伝写本

ロ、受經作法—元亨三年（一三一三）孤峰覺明所伝、塩山

向嶽寺伝來

（＊二資料は合軸）

⑦禪文化研究所史料室所蔵史料

イ、大燈百二十則

（識語）永正十六年（一五一九）己卯三月一日 書之宗意

清菴和尚筆跡 謹意後改冑

瑞堂紹証焉（印）（印）

写

⑩竜谷大学図書館所蔵史料

イ、性天和尚妙心寺入寺儀注—元錄十年（一六九七）性天  
の沙心入寺諸儀礼の注

ロ、大徳寺年中回向疏草紙

ハ、清規私沙—叢林用語の解説、享保十八年（一七三三）

書写

二、南禪諸回向—南禪寺清規集、寛永三年（一六二六）書

写

⑧内閣文庫所蔵史料

イ、大徳寺入室行記（内題、行卷）

元和三年巳年（一六一七）仲秋朔日 宗規記焉

口、雜用集—旧浅草文庫藏、大徳寺系清規

ハ、韋菴日用—旧浅草文庫藏、日分・月分清規

イ、慧山古規—文保二年（一三一八）成立、永正二年（一

五〇五）書写、東福寺系清規

六、おわりに—さまざまな出会い—

以上、研修期間中に収集した文献史料の中から、主なもののみの列記に終わつたが、今後はこれら伝授相承の諸史料の検討により、中世禪宗相伝史料の研究に関してまとめる方向で研究をすすめたい。

⑨大谷大学図書館所蔵史料

公費在外研究・京都研修の二年間は、今になつてみればアツという間に過ぎ去つた感があるが、改めてノートを繰つて

みると、じつにさまざまの方々に出合い、また東京を中心で研究活動をしていたのでは遭遇し得ない多くの体験も味わうことことができた。この間、必ずしも和気藹々とした人間関係ばかりが続いたとは言い難く、差別問題などで時には感情的な対立もなかつたわけではないが、それらも含め、二年間に出会った方々に対する感謝の意をこめ、お名前を記しながら振り返つて見たい。

まず、京都滞在期間中の寄宿先については、既に記したように最初の一年間は、万上商店社長万上精一氏の京都のマンションをお借りして、朝夕比叡の山容や東山の山波を眺めつつ快適な日々を送ることが出来た。二年目についても既に述べたように、元駒沢大学保健体育部長・教授の原山先生が職を退かれて帰洛され、先住様の御遷化に伴い京都の名刹天寧寺の後住を董されたことから、末寺で兼務もされている千本通りの交通至便の地にある大通院に寄寓させて頂き、万上氏のマンションともども、京都にやってくる演習や中国文学ゼミの学生諸兄の宿泊所としても大変お世話になつた。この因縁によつて、天寧寺様御所蔵の史料も拝見する機会が得られたもので、重ねて厚く御礼の意を表しておきたい。

次に、花園大学の受け入れに当たつてはもとより、資料収集等、公私ともにお世話になつたのが、元花大教授・現瑞巖寺僧堂老師の平野宗淨先生で、さらに平野先生を通じて多く

の方々と出会うことができた。中でも、部落差別はもとより在日朝鮮人の問題を始めとするあらゆる差別問題に対し、講演や執筆活動を通して運動を展開しておられる作家の真継伸彦先生には、いろいろな場所や施設に同行させて頂き、その現場等においていろいろと見聞をさせていただいた。

たとえば、一九八七年七月十六日から十七日にかけて、昭和初年に「国立らい療養所」として設立された、岡山県邑久町虫明の難島にある国立療養所長島愛生園を訪問することができた。真継先生は文壇の碁聖に何度も輝いた碁の名手であり、またインドの救らい活動に献身された宮崎博士（航空機事故死）ともかつて懇意で、以前より種々の場をつうじてハンセン病患者の方々と囲碁の交流を続けておられ、この時の訪問も愛生園の囲碁クラブとの交流ということで、平野先生・望月広三師と、同行四人の訪島であった。十六日は夕方到着であつたので、その夜は園長友田政和氏・事務部長迫幸雄氏を交えて会食し、療養所の歴史から愛生園の現状・問題点、将来の課題等、話題は多岐にわたつたが、こうした医療関係の仕事に三十年間携わってきたという友田園長の話は淡淡としておりながら、しかし「背負つている病名の重さと山地という生活環境のせいか、島内の患者にはいわゆるボケ老人が少ない」「年齢的要因からか、皇室崇拝者が多い」「社会復帰者で老齢者の帰島現象が増えている」等、鋭い問題点

の指摘があった。

翌日十七日は、隣接する光明園という施設を始め島内を案内して頂き、また建設中の長島架橋の現場では、海峡わずか三十メートル、長さ百五十メートル余の橋を架けるのに大反対が続けられたという話を聞くにつけ、偏見の根強さを思い知らされる。島にわが子を送った親が、園内の患者が見える対岸にテントを張つて子供を見つめ続けたという類の話も数知れず、その実感からは名作とされる松本清張の『砂の器』も、社会派といわれるにしては問題の焦点が不明である。

午後は、真継氏と望月師は暮会所で囲碁クラブの方々と一局囲み、平野先生と私は、山田無文老師の定期的な来島もあって作られた参禅会である「修証会」の高橋正八・和公梵字・西部等の皆さんと懇談会を持ち、山田老師の話題や祥福寺僧堂のこと、さらには発心寺や瑞應寺等の曹洞宗の道場、澤木興道師・高階瓌仙禪師のこと等まで話題はひろがった。園内でのサークル活動は他にも多くあり、文芸活動も盛んで、和公梵字さんは文芸誌『愛生』の編集長で、俳人としても知られ、帰り際には船付き場まで追つてこられ、自選の句集『黄鐘』の贈呈をうけた。和公氏とはこの時を機会に今日に至るまでお付き合い頂いている。

その後、一九八八年五月、隔離以来五十八年振りに長島と本州側の邑久町瀬溝を結ぶ「邑久長島大橋」が完成したこと

を、「『人間快復』へ一八五メートルの架橋」として報ずる新聞記事に接したが（京都新聞五月七日付、夕刊）、折りも折り同月に、「ハンセン病療養者締め出し」「試合前の握手嫌」という群馬県のゲートボール協会の措置に関する報道もあり（福井新聞、五月一六日付）、ハンセン病に対する認識不足の実態、いわれなき偏見・差別の根深さを思うにつけ、「ハンセン病に対する差別がなくなる前に、患者そのものがいなくなりますよ」としみじみと語った、愛生園長友田氏の言葉が今も胸に響く。差別の対象がいなくなつたからといって差別をする心が解消されるわけではなく、差別者は新たなターゲットを探す、そしてそれは今度はエイズかもしない。

一九八七年七月二十六日、かつて版画家の棟方志功が滞在して多くの作品を制作された富山県福光町光徳寺でおこなわれる「光徳寺せみしぎれ音楽会」という一風変わったコンサートに参加したが、これも光徳寺友の会の会長を勤めている真継氏の紹介によるもので、夕方六時半より光徳寺本堂において、文字通り四方から押し寄せる蟬時雨を聞きながら、N響のフルート奏者小出信也氏やチエンバロの春山操氏を始めとする演奏や独唱に耳を傾け、一時夏の暑さを忘れた（翌一九八八年八月七日のこの音乐会には、大学院生の池田道浩、中国文学研究会の岩崎道子の両学生も参加した）。

翌日の二十七日は、もと法藏館の編集長で現在富山県の過

疎の村に一家で移住し、旧家を買い受け休耕田を借りて有機農業を始め、炭焼きも習い新しい生き方を模索中の美谷克美氏のお宅を会場にして「新しい宗教を考える会」が開催され、千回峰行の満行者である天台宗の堀澤祖門師を始めとする十数人の参加者があり、花園大学からは平野先生・入矢先生も出席された。ただしこの会は、席上「宗教は一人一人の不安感から出発するものであり」「欠落したものを埋め」「自己を定立する以外にないものであり」「欠落したものを埋め」「自己を定立する以外にないものであり」「一人一人に新しい宗教があるはず」であるとし、魯迅の「道は前提としてあるのではなく、人が歩くことによってできるもの」とする言葉を引用し、結局「非道を行くのが仏道であり（『維摩経』）」、「格闘する相手は自己である」という主旨の提言をされた上で、「来世（後世）を認めない上で回復の可能性があるとすれば、それこそ真の現代的宗教となり得る」と断言された入矢先生の説に対する決定的な反論もなく、現在休会状態である。

二十八日は、小松市・松任市を中心[newline]に新しい宗教運動を起こしておられる安嶋是幹師の案内で、平野先生・入矢先生とともに五箇山地方の合掌作りの村や、妙好人赤尾の道宗ゆかりの行徳寺を訪ねたが、さらに礪波郡福岡町の真宗大谷派林照寺堀部知守師の案内で、富山市内の被差別地区を視察させてもらった。そこは市内の中心からほど離れていないところ

ろで、行政上同和地区の指定を受けていないので、一切の対策事業から外されており、環境整備も全くなされていなかつた。堀部師は独自に地区の人たちをオルグして解放同盟を結成させたということで、執行委員のM氏を紹介され実状をいろいろ聞くことができた。M氏の話によれば、地図や行政上の正式な住所表示もない被差別地区を意味する地名が、つい近年まで市役所からの案内などに使用されていたという（被差別地区は二つの町にわたるため、双方の町名の頭の文字をとって名付けられた）。また昔、筆者が子どもの頃、毎年定期的にやって来て宿泊する「富山の薬やさん」がおり、近郷の村々を回り歩いて日頃使用する薬を詰め代えていたが、「薬やさん」が担つていた、きれいに皮で縁取りされた行李に薬袋が整然と並べられていたのを、おまけに貰う風船等の玩具とともに覚えているが、この薬を入れて運ぶ行李に皮で縁取りをして補強する専門の職人の方が一人だけまだおられるというので、M氏の案内で訪問し、仕事の内容や地区の現状についての話を聞くことができた。それにしても、こうして明かに被差別地区であることが分かっていながら同和地区認定をしようとしたい県や市の行政の頑迷さには呆れる。この年の富山行はわずか三日間の日程であったが、仏教と現代、仏教と社会運動などの問題を考える多くの材料を得ることができたようだ。

真継先生にはまた、京都祇園の夜の案内もして頂き、故高橋和己が好んで通った店も紹介された。真継先生は高橋和己とは特別親しい関係に恐り、評論著書も多い。この店では、一九八八年三月一日、暫く日本に滞在して教鞭を執つておられた上海国際問題研究所主任で比較文学の瞿麦先生の送別会が開かれて、舞子さんの接待なるものも初めて体験した次第である。これも学恩の一端と言えよう。

仏教と社会運動という問題について記しておかなければならぬのは、長島愛生園にも御一緒し、常に刺激的な問い合わせ筆者を戸惑わせた、真宗大谷派の僧侶の望月広三師である。望月師は洲本市（淡路島）の浄土真宗淨泉寺の住職であるが、かつて姫路市にある大谷派山陽教区の教導も勤められ、大谷派の青少年部の指導主事もされていた、中堅の指導的位値にある方であるが、親鸞上人の精神に立ち帰つて真の信仰を復興すべく、姫路に若手僧侶を主な対象とする「聞法道場・真宗学舎」を開設したのを皮切りに、岡山県津山市・西宮市と次々に聞法道場を開設され、毎月定期的に熱気をこめて親鸞を語る会を続けておられる。特に津山と西宮の道場は、同和地区の中のアパートの一室を借りて開設され、僧侶ばかりでなく地区の人たちも参加して、部落解放と宗教・仏教の問題なども、幅広く語り合っている。一九八七年三月二十八日、「宗教と部落差別」研究会が西宮市の被差別地区で

現地学習として行われた際に、望月師の聞法道場も紹介され初めに知り、以後の二年間、事情の許す限り月一回西宮にておられた、「親鸞は弟子一人も持たず候」「親鸞と差別」「私にとつての解放運動」「真継氏著『心の三つの泉』を読んで」等の折り折りの基調となる発表を行つた後、慶子夫人の手料理で食卓を囲み共食共飲しながら、一緒に談論風発の夜を過ごさせていただいた。この聞法道場のことば新聞でも紹介され（一九八七年一月十五日付、神戸新聞）、真継氏も常時顔を出され、平野栄久氏（姫路独協大学教授・文芸評論家）・熊谷一綱氏（関西学院大学教授）等、毎回多彩な顔触れで賑わつた。

望月師はまた、真宗教団内の様々な差別的体質や不合理さにも積極的に発言されて、宗門批判も敢て辞さない立場を貫いておられ、前述の訓<sup>くるべ</sup>霸元宗務総長の差別発言に対し糾明の口火を切つたのも望月師であった。さらに慶子夫人も夫唱婦隨で共に活動しておられ、真宗寺院の坊守問題等の女性問題にも積極的に取り組んでおられる。一九八九年三月十四日、望月師の斡旋により、姫路の真宗大谷派山陽教務所で開催された坊守学習会で、「曹洞宗における尼僧問題について」という演題で話をする機会が与えられた。双方の教団組織の性格の違いなどもあり、中々容易には理解してもらえたなかつたが、真宗教団が現実に抱えている問題に直に接する機会が持

てたことは、貴重な経験だつた。

この講演会の夜、二年の研修期間も終わりに近づいた筆者のために、西宮の聞法道場にいつも集まる人達で送別会を開いて頂いた。会場は聞法道場近くの焼肉屋で、飲物や食べ物も大量に持込み、店の自家製のドブロク（恐らくは密造酒なので、店の名は秘しておくが、わざわざ神戸付近からこれを目当てにやって来る人も多いという）を何杯も何杯も傾け、心温まる夜を過ごした。集まつて頂たい方々は、部落解放同盟西宮支部の坂本氏・高橋氏を始め、市役所でケースワーカーの仕事をしておられる谷岡氏・平野栄久氏・真継伸彦氏・マカダム幸子氏・望月師夫妻の皆さんで、NHK大阪制作部で主に障害者の番組を担当しておられる杉本章氏も顔を出された。

一九八八年八月二十七日から九月十一日にかけては、花園大学教授小野信爾先生を団長とする訪中団に参加し、花大の学生諸君と念願の中国四川省・湖北省の旅行をすることができた。この旅行には当初より入矢先生も参加の予定で、文献で知られる襄陽の繁華街のさんざめきなどに想像を馳せていたのであるが、御一緒出来なくなり残念であった。参加者は、文学部長の伊達宗泰先生を始め、真継先生・平野宗淨先生夫妻、さらには望月広三師夫妻と愛娘で阿弥陀如来の申しこともいうべき彌名子ちゃんも加わるという、筆者にとつて

も因縁深い人達ばかりで、終始賑やかな団体となり、二週間の長旅を楽しく送ることができた。成都・峨眉山・樂山・青城山等の見学、口が燃えあがりそうな辛い火鍋料理にと思い出はつきないが、九月四日より六日にかけての長江六三八〇キロ、三峡一九三キロの船旅は、ゆつたりと流れに身をまかせる三日間で、珍しく三日とも快晴に近い好天気が続き、支流の小三峡にも立ち寄つたりで、中国旅行はかくあるべしという感を深くした。

最後に、二年の研修期間中に出会つた人達は日本人ばかりでなく、しかも筆者の専門分野にも関係する課題に取り組んでおられる方々もおられたので、これらの人達についても一言付け加えておきたい。

筆者が研修に出発する前年に、アメリカ・イエール大学のワインシュタイン先生の門下で、日本曹洞宗史の研究をテーマにドクター論文をまとめるために駒沢大学に研究生として來ていたウィリアム・M・ボディフォード氏は、筆者の扱っている抄物資料、特に切紙資料に興味を持ち、多くの資料を携えて帰国したが、柳田聖山先生の紹介で友人となつたスタンフォード大学のベルナル・フォール助教授も切紙資料に興味を示し、かなり突っ込んだ議論もやつた。フォール氏は、以前にも京都大学人文科学研究所の柳田先生のところに留学し、中国禪宗史を専攻された方であるが、インドでの生活の

経験もあり、教理史はもとより教団史、さらには民俗学・道元禅までもこなすマルチ学者で、コーネル大学からスタンフォード大学に移籍するに際して、半年間の猶予があり日本に来られていたもので、東方学会等で研究発表もされ、また資料収集も盛んに行つておられたが、切紙資料にも大いに興味を持ち、永光寺の切紙など原資料も多数コピーして持ち帰つた。フォール氏といいボディフォード氏といい、日本ではまだあまり注目されることのない切紙資料を、アメリカの学者が注目してくれるのは、やはり思考の柔軟さのしからめるところと、少々羨ましく感じられるが、いかなる研究成果が出されるかを楽しみに待ちたい。

一九八七年十二月十六日、駒沢大学の吉津宜英先生がヴァージニア州立大学のポール・グローナー助教授を伴われ京都に来られたので、フォール氏と四人で、相国寺内林光院にある法宝義林研究所を訪問し、『法宝義林』の編集長ユベル・デュルト先生を紹介して頂き、また辞去する際に、北フロリダ大学のJ・C・マーランド教授が来られ、一緒に百万遍付近の喫茶店でしばし談話したが、この夜は京都商工会議所ホールで詩人金時鐘氏の「在日と人権」と題する講演に出ることになつていたので、一足先に退出した。フォール氏とはその後も度々逢い、お互に訪問し合つたりして話が弾んだが、禅宗史におけるミイラ信仰を強調され、後の頂相尊重も

その延長線上にあるのではないかという。やや行き過ぎの議論ではないかとおもわれたが、考えて見れば宝慶寺の寂円禪師像も荼毘後の灰で作つたといわれており、一休像の髭も本物を植え込んだ話もあって、あながち飛躍とばかりも言えないかもしれない。さらに総持寺に石頭希遷のミイラが奉安されていることを話したら、後日、宝物殿の高橋全隆師を訪問してミイラを拝観してきたということであつた。

一九八八年正月のある日、東大大学院に文部省の給付奨学生として留学していたトマス・フリッシュコーン氏は、ベルリン自由大学の博士課程の学生で、鎌田茂雄先生に勉強と合氣道を習い、また弟子丸泰仙師について参禅の経験もある爽やかな好青年であるが、禅宗の勉強ということで駒沢大学にも来て筆者の講義にも出席していた。現代の日本における参禅会や社員の参禅研修などについて、社会学的な検討をして見たいということを以前からもらっていたが、中々思うようなデーターも集められないということで、帰国の日も近づき京都見物に来たのであった。半日ほど話を聞いて多少の応答もしたが、教理学的な問題についてはともかく、こうした要請には仏教学部のカリキュラムでは応じきれないというのが実状であろう。

以上、思い付くままお世話になつた方々や様々な出会いについて、ノートから抜き書きして來たが、そらにざつと指を

折つただけでもここに掲げた数倍の方々のお蔭を被つたことは紛れもない。他大学等の機関所蔵の史料請求に親身になってお世話を頂いた花園大学図書館員の方々、研究施設を自由に使用させて頂いた禅文化研究所梅事務長さんや吉沢編集長を始め所員の皆様、時々京都見物にやって来ては一人身の無聊をかこつ生活をなぐさめてくれた、もと演習の学生や駒大中国文学研究会の諸弟妹、その他多くの方々に感謝の思いを寄せつつ、在外研究二年間のつたない報告の稿を閉じることにしたい。